
T・C!

夏木 岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T・C！

【Nコード】

N3448G

【作者名】

夏木 岳

【あらすじ】

「ねえねえ、キラー・クイーンってしってる？」うかつに噂を信じると、痛い目にあうものです……

始まり始まり（前書き）

この作品はジャンルシャッフル企画に参加しています。「ジャンルシャッフル企画作品」と検索すると、企画参加作者様の作品を見ることができます。

始まり始まり

「うちの高校にさ、「キラー・クイーン」ってのがいるらしいよ」

入学早々、片鞠高校におかしな噂が流れておりました。キラー・クイーン。彼女は一体何者なのでしょう。葉瀬集中学出身で、でもそんな中学校は存在していないとか。クイーンと言いながらも本当は男だとか。実は外国の殺し屋キラーだとか。男を殺し続けるクイーンだとか。噂に様々なフカヒレがくつつき過ぎて、実態を憶測することはとても困難。

それでも噂は噂。風化するのも早いもので、気が付けば話に出す人は数えるほどになりました。

それでもそれでも、彼は知りたかったのです。大辻健おおつじけんくんは知りたかったのです。クイーンが美少女というところだけを信じて。

「トラジック・コメディ！」

「上記じょうきってわけ。とりあえず今日は教室という教室を見てまわる予定だ」

「前置参照まへくってわけか。でも今更だよな針井はりい」

「だよな間開まあく。今更キラー・クイーンなんてネタか何かか？」

大辻くんは放課後、級友の針井くんと間開まあくくんにキラー・クイーン搜索を持ち出しました。でも二人はとても乗り気じゃありません。逆にDSで対戦ゲームには夢中です。

「明日マツク奢ろう。それでどうだ？」

ちらつと財布に相談してみると、駄菓子屋を手ぶらで帰るほどお金がありました。あとカードにバイトの貯金があるはずですよ。

「マックってパソコンだろ？ そんな金あるのか？」

「吉マクドナルド野屋だよ」

「マクドって言え」

マックとマクドでは意味が違うそうです。味も変わるそうです。

針井くんと間開くんはどうする？ と迷っているようです。一ゲーム終えてまた針井くんはどうすると聞き、間開くんはどうすると聞きました。さらに一ゲーム終えて針井くんは以下同文と言いました。「DS疲れたし、いっちょやるか」

「そうだね」

夕日が街を包む頃、二人はやつと動く気になりました。主役であるはずの大辻くんが見当たりません。夢中になってるうちに既に行ってしまったようです。一時間近くどうすると言いつづけていたのですから当然でしょうか。

何はともあれ、搜索開始。まず隣の教室とかは無視。同階の社会科学準備室を覗きました。名前の通り社会科学の先生が作業する部屋です。誰も居ないようです。地球儀に大きな壁掛けの日本地図。雑多としている仕事場ですが、机に丁寧に書かれたルーズリーフがありました。それだけが綺麗に置いてあるので目立つのも当然です。

「おい間開、見てみる」

「これは日本史の中期テストじゃないか！」

二人は先生が戻って来やしないかとドキドキしながらも、テスト範囲を書き写しました。二人はこの日、いけないひとになったのです。曰く不良と言っやつです。

一方その頃大辻くんは、部活棟の方にいました。この学校の特徴の一つ、旧校舎を建て替えた広くて大きな部室のみの建物。それが部室棟です。三階では美しいプラスチックバンドが、地下の元ボーイ室からはギターの轟音と慎ましやかに低音が聞こえます。大辻くんはまず一通り見ることにしました。扉の名札を頼りに、野球、サッカー、バスケット……様々な部活名が確認できます。

「映画研究会？」

みしらぬ部活にぶつかりました。たしか新入生歓迎会では、そんな部はなかったはず。暗幕に遮られた教室を見て、ふと疑問に思いました。何か臭う。大辻くんは時計よりも静かに扉を開けました。遮光が徹底してあり、光が入って気付かれることはありません。外の暗幕を通り、ちらりと中の暗幕を捲ると、女の子がぼつんと一人涙をボロボロとこぼしていました。

「これぞ究極の愛よお」

内容もタイトルもわからない、外国語で白黒映画ということしか見てとれない。謎に謎々していると、突然オカンが走りまわりました。ぞくりとして振り向くと、細いキツネ目の男が。思わず叫びそうになりましたが口を塞がれ、教室の外へ引きずり出されました。

「いけないねえ一年生君。部員でもないのに勝手に入って」

上履のカラーは青。どうやら三年生のおうです。ちなみに二年は赤、一年は緑です。大辻くんは謝ろうとしましたが、いや謝らなくていいと牽制され、持っていた紙コップを渡されました。中身は珈琲牛乳のおうです。

「まあ飲みなよ一年生君」

ニコリと穏やかな笑顔。どうやら悪い人ではないおうです。

「ありがとうございます、先輩」

大辻くんは紙コップに口づけました。

「君、クラスと名前は？ 僕は久米忠ノ介」

「一年三組、大辻健ツス」

久米先輩は三組かあ、と何かくすくす笑いました。

「三組なら由紀様の担任だったね。君、うまくやれてるかい」

たしかに三組は勇田由紀先生だ。オトナの魅力溢れる29才既婚。特に厳しいところもなく、かといって甘いわけじゃない、優しい先生。少なくとも大辻くんはそんな印象を持っています。

「別になんていうか、普通ですよ」

そうかそうかと久米先輩は意味深な笑みを浮かべました。

「いや何ね。彼女の女王様っぷりはまだ……」

女王！ キラー・クイーンと何か関係があるのではないでしようか。

と、そこでガラツと映研の扉が開き、目の泣き腫らした女の子が出てきました。彼女は久米先輩と目が合うと、目で何かを受け取りました。

「クーちゃん、その子入部希望？」

「ただだよ。部についても話してない」

可愛らしい金髪の……金髪は校則で良かったのでしょうか。久米先輩をクーちゃんと呼ぶ辺り親しい間柄のようです。

「私、高槻二ーナ。今日はもう帰るんだけど、今度映研について聞いてね」

にこつと笑い、ギュツと大辻くんの手を握りました。約束だよ、と念を押してまたスマイル。そしてじゃあねと二ーナちゃんは走って帰っていきました。彼女が見えなくなった後、久米先輩は後片付けだと言って教室へ。大辻くんはギュツの感触に立ち尽くしました。「エーと。何をするんだっけ」

そう。キラー・クイーンを探すこと。女王様と呼ばれた勇田由紀先生について聞きたいところ。でも彼の少年の心は二ーナちゃんです。すっかり忘れて帰ってしまいました。

「おい間開、見る！ 生物？の試験範囲だ！」

大辻くんがお花畑にいるころ、間開くと針井くんはテスト問題をコンプリートしていました。

「しかし俺ら悪いな」

「最低つてのはよくわかる。だがな針井、据膳食わぬは……据膳食わねど……高楊枝と言うじゃねえか」

生徒手帳にびっしり書かれたテスト範囲に、ついニヤリとしてしまふ二人。高笑いしたいのを抑えて、よしこつそりと去りましょう。高校生活をおもしろおかしく過ごすためにばれてはいけないのです。

ばれたら首がハリウッド映画みたいに吹き飛ばに違いありません。そうならなくても“清雄^{せいかつしど}士道”行きになるでしょう。清雄士道とは真の生活指導部、教育理念は清く正しく士道に殉じ……曖昧なので割愛。とにかく危ないところなのです。というわけで黒い二人はこっそりと理科室を抜け出しました。

暗転しまして舞台は自宅、一人の悩める男の子がいました。彼は大辻健くん。高槻^{たかつ}二ーナちゃんの顔を浮かべると胸がどうにかなくなってしまうのです。出会いは一時間も経たない過去。でもこの胸のモヤモヤは恋病なのかお昼のアンパンなのかはわからないでいました。つづく。

見つけた見つけた

それは良く晴れた朝でした。じりりと目覚時計が鳴り響いて、布団がもそりと動きます。緩やかな動きで目覚時計を止め、スロウに起き上がる、緩慢な動作でベッドから出ました。

彼女は部屋に日を取り入れ、ぐぐつとのびました。眩しい光に少し目が眩むけど、眠気はばつととれました。

そのまま二階の自室を出て居間へ。階段を下るとき、ベーコンと珈琲がおいしそうにふわりとおいました。

「おはよう、愛梨佳」

「おはようございます、菊子お姉さま」

食卓につくと、丁度トーストが焼き上がったようです。菊子と呼ばれたセクシーな女性はトーストを二枚皿に移し、愛梨佳という可愛らしい女の子の前に出しました。

きつね色に焼き目のはいったトースト。純粋な黄色のスクランブルエッグに、こんがり赤色ベーコン、しゃきしゃき緑色のレタス。温かいミルクも添えて。

「いただきます」

渦藤家から代わりまして大辻家。両親は朝がとても早いので既にもいません。

大辻くんはがばつと起き上がり、うわつと部屋を飛び出ました。いそいで顔を洗って歯を……美しくないので省略。穏やかなやさしい朝じゃないのでとにかく省略。

省略→学校に着きました。

「なあ間開。DSって何の略だ？」

「でら凄い。じゃないか？」

「おお、そうだったのか！」

既に学級の皆は教室にいました。HR前の談笑中です。HRとは

もちろんホームルームのことです。ホームランでもハードロックでもありません。

大辻くんは挨拶を済まし、間開くと針井くんにキラ・クイーン捜査のことを話しました。

「そうそう、昨日先輩に聞いたんだけど、担任の由紀ちゃんがキラ・クイーンかもしれない」

昨日の久米先輩の言葉によるば、彼女は女王様だそうです。キラ・クイーンと女王様。何かにあります。

「じゃあ本人に聞こう」

「そのとおり、それがいい、そうしよう」

針井くんと間開くんはストレートに攻めるタイプでした。

HRが終わり、三人は由紀先生が職員室へ戻っていくのを引き止めました。先生はキラ・クイーンですか？ と何の脈絡も無く直球を投げました。キラ・クイーンがどんなものなのかも知らないのに、いい度胸です。先生は少し戸惑って、わからないと答えました。

「でもでも、女王様は知らないけどお嬢様なら知ってるよ」

「じょおう」と「おじょう」何か関係があるのでしょうか。発音的には似ていますが、とりあえずこれしかヒントが無いのだから従うしかありません。三人はお嬢様のことについて聞きました。

さて、放課後です。今日は三人揃って動きました。いざ部活棟へ。

「でもよ、本当にそんな部活あるのかな」

その部活はまだ同好会ですが約七名所属しているといえます。二年生が一人、あとは一年生。そして部員全員が月ヶ丘中学卒業という謎の部活です。名前はまだ出し惜しみます。

浪漫探求会、UMA研、革新倶楽部……奥へ進むに連れて怪しく、また雰囲気も変わってきました。強い敵とか出そうです。

「……」

通路の先の角に誰がいる。影に気付いた間開くんは針井くんの手

を小さくつつきました。そしてまた針井くんも大辻くんの背中をつまみました。ぴたり、と立ち止まり三人。目線は泳がせず、真っ直ぐをみています。でもこの不思議で不気味な空気は、今すぐにでも走り出したいくらいです。

おや。影が姿を表しました。歩いて前を横切っています。ですが全身真っ黒です。向こうが薄暗いのもありますが、本当に顔も含めて全身真っ黒だったのです。大辻くんはその姿にピンとききました。指名手配犯ではないけれどやつです。きっとキラ・クイーンのです。

「針井、間開、キラ・クイーンだ！」

「なんでわかるんだ？」

「そりゃあ黒塗り野郎は犯人って決まってるじゃねえか。名探偵口ナン君知らねえのか」

それでは実は犯人ではないという人は白塗りなのでしょう。なんだかよくわからない理屈ですが、とりあえず走って捕まえてみるようです。しかし、黒塗りはすぐに通り過ぎてしまいました。

いざ角に差し掛かる。その時、がらりと教室の扉が開き、女の子が出てきました。

「高槻先輩！」

眼前に立ち塞がるのは、金髪っ子のニーナちゃんでした。

「あらこんにちは。大辻くん。お友達さんも」

ある意味やつかいな相手です。大辻くんにとっては新・憧れの先輩なので。キラ・クイーンを追いたいけれども、お話もしたい。

「大辻くん。ニーナお話があるんだ。来てくれるよね」

「大辻、キラ・クイーンは目と鼻の先だ」

葛藤します。恋と好奇、どちらをとるのか。大辻くんは一人、二つはとれません。

「大辻くんはニーナを偉ぶって信じてる」

なんてくすぐったい言葉でしょう。

「目を覚ませ大辻。死んでいった者たちの為にも、俺たちはやらなきゃいけないんだ」

「いったい誰が死んだというのでしょうか。物騒な話です。」

「大辻くん。来て」

「またギュツと手を握れば決め手になったかもしれない。」

「大辻。あの日の般老心経を忘れたか！」

「そんな話を書いた覚えがありません。仏葬な話です。」

「俺はキラ……」

クイーンを。と言いかけてました。誰も死んでないのに心が動いたようです。多分フレーズに弱いタイプなのでしょう。

しかし、ニーナちゃんは突然言い出しました。

「大辻くん。昨日、私の珈琲牛乳飲んだよね」

「なんででしょうか。私の珈琲牛乳。」

「ま、まさか」

昨日久米先輩にもらったものが思い浮かびました。そしてハッと気付いたのです。この戦いに勝ち目はないことに。大辻くんは昨日「ニーナちゃんがお金を出した」珈琲牛乳を飲んだのです。

「女の子がお茶代出したのに、少しも付き合ってくれないの？」

針井くんと間開くんが目を伏せました。やくざ屋さんと目が合ったときくらい素早く。

「じゃあ行きましょう」

その時、大辻くんはドナドナの歌を聞いたそうです。

針井くんと間開くん。二人になっしまいました。

「とりあえず黒塗追おうぜ」

t o b e e k o n t i n u u d .

お終いお終い

continueしまして。

針井くんと間開くんは二人、キラ・クイーンを追い、やつが消えていった階段を上がりました。二階に上がるとすぐに「錦将会立花組」と書かれた部がありました。まるで見えなかったように足早にスルーしました。

二階の端まで一本道。三階は誰も使っていないはずなので、ここにいるのでしょうか。少しづつ進んでいくと、「あの部」を見つけました。

「これ、先生が言ってた部じゃ……」

「ああ。どうもおうな」

キラ・クイーンの消えていった二階。そして今日の目標だった部「ネガティ部」

二人はここがゴールなんだと感じました。

「間開、入るぞ」

恐る恐る扉に手を伸ばすと、突然勢いよく開き、男の子が飛び出してきました。

「あっ！」

つと言つ間に針井くんにぶつかりました。男の子は小さく、転んでしまい、体重のある針井くんはびくともしませんでした。

びくともしないですがびくくりしました。ボタボタ、と赤いものが針井くんのお腹から垂れてきたのですから……

「ハリイイイ！」

閑話、映研。大辻くんは映画を見ていました。ニーナちゃんと久米先輩に洗脳されそうなほど説明を受けたあと、流れるようにシアターの前に座らされたのです。

さて針井くんはどうなったのでしょうか。男の子にぶつかった途端に赤い赤いものが流れてきたのですが、実はただの染料だったそうです。ネガテイ部とは、写真を意味するネガとお茶を意味するティーからなっているそうで、衣服の製作などもしているそうです。制服が真っ赤に染まった針井くんはなにやら素敵なスーツを着せられました。

「ごめんなさいね、うちの子が迷惑かけて」

この方が部長でしょうか。丁寧な言葉使いで謝っています。しかしなんとという格好でしょうか。深紅のドレスを身にまとっています。「貴人、なつき、二人にケーキでも食べさせてあげて」

ドレスの子は一年生部員二人に指示しました。彼女は偉そうともそれそうですが、むしろ気高いようでした。

「私は渦藤愛梨佳。君にぶつかつたのが蜂須賀修次で、ケーキを運んだのが草間貴人と飾磨なつき。部長の家侘千代子は今席を外しているの」

「一年三組、針井と間開」

「あら、君たちがそうなの」

愛梨佳ちゃんは一つのアルバムを取り出すと、二人に渡しました。それにはいろんな写真があり、ネガテイ部員全員が個性的で素敵な服を着て写っておりまして。女の子はどれもすごくかわいいし、男の子はどれもクールです。どの服も高そうで、細かく縫ってあります。すべてネガテイ部の作品なのでしょうか。

「こ、これは！ 間開！」

そしてアルバムの最後にデザイナーのサインがあり、それに気付いたのです。それには日呉洋子、高井草壁、ザ・ブーツ、マキスタイル、世界最高峰超美人ドレスサーなつき、そしてキラ・クイン。ン。

「誰がキラ・クインかは言わないけれど。これで満足したかしら」

日が暮れて、あるファミレス。

「しかしキラ・クインがあんなに簡単に見つかるとはな」

「誰かはわからなかったけどな」

「いや、十分じゃないか……おお、大辻が来た」

二人はキラ・クインを発見したのと、かわいい子がいっぱいいたことを話しました。

「俺は……」

この話の主人公のくせに一番大事なところに立ち会えず、さらにケーキも食べれず。宗教じみた映研勧誘をずっと受けて出番も無くなり、「ローマの休日出勤を白黒字幕なしで見せられて……」

さらにさらに、実はニーナちゃんと久米先輩が付き合っていることも知ってしまったのです。

次の日。大辻くんは一応ネガティ部へ向かいました。紅茶の香り漂う素敵な空間でした。

「昨日いなかった人ですね。私は綾瀬万輝。まだみんな来てないから、ゆつくり待ってて下さい」

可愛い小さい子です。彼女に接待されながら少しすると、部員が一人入ってきました。

「アリちゃん、昨日来なかった子来てるよ」

すすす、すごい可愛い子がきました。むしろ美しいです。なんとたえましようか。

「私は渦藤愛梨佳。要件はこれでしょう？」

針井くんたちと同じく、アルバムを渡しました。キラ・クインがいることはわかりましたが、もうなんだかどうでもいいようです。むしろ愛梨佳ちゃんのほうが気になります。まったく惚れっばい性格ですね。

「お、俺は大辻健！ よろしく！」

不思議なプレッシャーにどもりながらも、大辻くんは愛梨佳ちゃんと会話することができました。

五時を回ると、万輝ちゃんは習い事だそうで帰っていきました。

今日は部員がほかにいません

。つまり愛梨佳ちゃんと大辻くん、二人きりです。

「あ、あのさ」

日が暮れて、あるファミレス。デジャヴ。

「大辻の奴遅いな。電話してみようぜ」

ぷぷぷ、ぷるる。大辻くん出ません。何コールしても出ないので切ろうとしましたその時。通話状態になりました。

「おう大辻。どうしたんだ？ まさかまだネガティ部か？」

「彼女はキラ・クイーン」

「え！ なんだった！」

「俺は一二九人目……」

「おい大辻、大辻！」

ぷつつ。意味深な言葉を残し、電話は切れました。その日はそれ以上繋がりませんでした。

次の日、大辻くんは学校を休みました。何があったかは、本人が多くを語らなかったためにわかりませんでした。しかし、ひとつだけ。なんとなくわかったことがありました。

彼はあの日、誰かに告白したようなのです。

キラ・クイーンの噂には真実があったのでした。

f i n

お終いお終い（後書き）

さてTC完結。このお話は長くなりそうな連載作品「トラジカメデイエ」の番外的作品となりました。トラジカはそのうち日の目を見るでしょう。コメディは難しいものですね。しみじみ思いました。

おまけ。

大辻くん。そのとき勉強してたものからできた名前。大津事件。なんだか重たい由来。

針井くん&間開くん。映画「ホームアローン」から拝借。あの子可愛いよね。いや可愛かったよね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3448g/>

T・C！

2010年10月8日15時35分発行